

【要旨】

カメラで他者をうつす行為から現れる「内なるアジール」

美術研究科 美術専攻 壁画研究領域博士後期課程3年 直島なぎさ

【研究内容】

本論は、カメラを用いたドキュメントの手法で制作される筆者の作品について、「内なるアジール」を探求する行為として位置付けた制作論である。

アジールとは、一般的に、「世俗の世界から遮断された不可侵の聖なる場所、平和領域、またその人と集団。自然の中の森・山・巨樹や奴隷・犯罪者などが庇護される自治都市・教会堂・駈込寺など¹⁾」とされる。

しかし、舟木徹夫によると、現代社会において従来の意味でのアジールはほとんど消滅し、個人の内面に転化されているという現象がある。²⁾

この個人の「想像力」としてのアジールは、神経症という病理の表出として、または宗教的な信仰心としての分析はなされているが、「想像力」自体、またはその産物であるさまざまな表現としての創作物に関して、「そこにアジール的な心性が見出せる」以上のことはあまり言及されていない。

本論では、情緒的・心理的避難所としてのアジールを美術制作の観点から考察していくことが目的である。

アジールに関しては、美術の観点から度々言及がなされ、国内でも様々な企画展や芸術祭を通して「アジール空間の再創造」が試みられてきた。

2022年に開催された、大阪関西国際芸術祭での「釜ヶ崎アーツセンター構想」や、2012年開催の東京創造芸術祭「アジール～真夏の夜の即興祭」、地域と博物館を開かれた場所としてつなぐことを目的に、岐阜県博物館にて2022年に開催された「ねお展」など、アジールづくりを明示した芸術祭は度々実施されてきた。住民のためだけに閉ざされた地域を、誰もが訪れられる場として開放するという意味では、地方芸術祭自体がその役割を果たしているとも言えるだろう。

¹⁾ 精選版 日本国語大辞典

²⁾ 舟木徹夫 解題—アジールの近代— 国書刊行会 2010年

これに対し、筆者は、美術作品を通して創造しうるアジールは、伝統的な概念である「物理的空間」を再現するだけでなく、他の形としての可能性があると考えている。筆者はカメラを使った作家一人（である筆者）の行為の集積で作られる作品（映像・写真）をアジールとして考えている。この観点に本論の独自性があり、既存のアジールの研究に新たな側面を加えることができる点と考えている。

本研究はこの目的に沿って、空間作りではなく、写真または映像によるドキュメントの手法で、対象者と制作者自身の様子を直接撮影する手法をとる。その手法は関係構築のさなかに立ち現れる内面化された「アジール」をカメラの特性を使って掴み、表象するための探究方法でもある。

第1章では、歓楽街のケハレ空間というアジール性を背景に持つ「仲町通り」にて実施した、アートスタジオ開設プロジェクト《Art and Research Bar》《異邦人》から、現代日本における物理的空間としてのアジールの在り方について考察する。現代において物理的空間としてのアジールは限界性がある一方、現代社会に適したさまざまな機能を複合的に柔軟に組み込むことで、その機能を失わずにいられる可能性を秘めている。また、《Art and Research Bar》を通して出会った花すいさん親子へのリサーチから、筆者にとって「行為としてのアジール」の可能性を見出す展開点が生まれた。



図1：《Art and Research Bar》会場風景



図2：《異邦人》展示風景

第二章では、映像作品《灯り》から、心象風景としてのアジールについて考察する。湖底に沈んだために実際には見る事が出来ない「大開集落」を、そこで生まれ育った安保さんという男性の撮影を通して、彼の心のうちに在る一つの風景として再び立ち上がらせることを試みた。映像というメディアの特性を用いた記録の蓄積は、対象者の存在を受容するための窓として機能する。



図3、4：《灯り》

第三章では、写真作品《見えなくなってもいいじかん》について考察する。対象者である筆者の家族に関係性の揺らぎが生まれた事件をきっかけに、身近な他者とのすれ違いや亀裂を抱えながらも、ともに居られる方法を、二眼レフカメラを用いた撮影行為を通して探る。筆者の持つ壊れた二眼レフカメラの構造を用いた、対象者を「見ない」撮影方法とそこから生まれたイメージが、アジールの伝統的に内包する「逃れ」の効用と重なり、筆者と対象者を受容するアジールの時間となって現れた。



図5：《見えなくなってもいいじかん》

現代において「アジール」は、あまり一般的に浸透していない、マイノリティな存在である。しかし、その効用をもたらす場やそれを現す行為は、古来から人間の営みとともにあった。発展と衰退を繰り返してきたアジールの現在は、歓楽街などのケハレのあり方がもたらす「楽」や、生きる上で生まれる「苦」を乗り越えるための知恵まで、幅広く多岐に渡る。現代社会に生きる人々それぞれが持つ「内なるアジール」の現れを発見していくことは、他者と関わりながら生きる私たちとの「生」そのものの探求につながるのである。

本論ではそのための制作方法として、映像撮影を用いた、他者の存在を受容するためのリサーチ活動や、「見ない」構造から他者との関係を再構築するための写真撮影方法などを見出し、記録することで、美術作品のアジールとしての効用という新しい可能性を明らかにした。